

【書評論文】

多民族共住と多民族混住

宇高雄志著『多民族〈共住〉のダイナミズム
—マレーシアの社会開発と生活空間—』(昭和堂、2017年)

井口由布

はじめに

わたしが初めてマレーシアを訪れたのは1990年のVisit Malaysia Yearの年だった。それから現在にいたるまで20年以上マレーシアにかかわってきた。宇高雄志『多民族〈共住〉のダイナミズム—マレーシアの社会開発と生活空間』(2017年)が描く1990年代から2010年代のマレーシアを、わたしも少なからず経験しているということになる¹。奇しくも本書を手にした2018年には研究専念期間でペナン島に一年滞在していた。その滞在期間中、みるみるうちにガーニー・ドライブ沿いの海が埋め立てられていった。「第5章 周縁」で述べられているとおりのできごとが起こったのだ。それだけではない。90年にはじめて訪れたジョージタウンと世界遺産となった現在のジョージタウンの変貌ぶりや、中東と未来とが混ざったようなプトラジャヤの風景、わたしがよくお世話になっている村の住居が毎年のように増築されていくことなど、わたしのマレーシア経験の諸断片を、本書はみごとに時空間の地図に位置づけてくれた。

本書は「異なる生活空間と社会条件下に見る「多民族混住」のありようを建築学の視点から探求する」ものである(本書: i)。建築学の方法論に精通していないわたしが本書を建築学の観点から論評することはできない。むしろ方法的なほうではなく、「多民族〈共住〉」というキーワードを手がかりにしつつ、マクロな視点とミクロな視点から本書を読み解いていくことにしたい。

I 民族界限

本書は、研究の方法の整理とマレーシアの社会開発の展開にかんする先行研究にあたる「第I部 進む開発と変貌する多民族社会」、村落・都心・周縁・郊外という四つの空間枠

¹ 以後「本書」と示す。

組みにおける八つの生活空間の訪問調査による「第Ⅱ部 変貌する生活空間と多民族社会」、全体の分析にあたる「第Ⅲ部 多民族〈共住〉のこれから」の三部構成である。著者はマクロなスケールにおける国土開発の進展とカンポン（村）、世界遺産都市、郊外団地、新都市などミクロなスケールにおける人々の生活の動向を多民族の混住という視点から描きだそうとしている。

著者はマレーシアにおける多民族混住について冒頭で次のように記している。

もっとも興味深かったことは、筆者がマレーシアにみた多民族混住は、単に、空間的に混じり合っているだけではなかったことだ。それは多民族社会の一断面であって、必要に応じて適切な間合いをも受けつつ、しなやかに相互の関係を調整し合っていた。（本書：3）

このような多民族混住のありようを示すさいに著者が使用している概念が「民族界限」である。著者によれば、マレーシアでは「いずれの生活空間でも緩やかに同じ民族が集住する界限空間が形成され」ており、これが「民族界限」である（本書：3）。「民族界限」とは民族ごとに集住する空間である（本書：260）。著者はこの「民族界限」が政策によって計画されたものではないと述べている。1970年代と80年代におけるマレー化、イスラーム化から1990年代以降の多文化主義的政策へと枠組みを変えつつある民族政策が、「民族界限」の形成を設計しているわけではないということだ。むしろマレーシアにおける「一人一人の生活者が時間をかけて自然発生的に作り出したもの」（本書：4）であり、「誰に命じられるでもなく自律的に生活空間の調整を続け」、無益な対立や衝突を回避してきたのである（本書：5）。著者によれば、このような「民族界限」はジョージタウンやマラッカのような都市においてだけでなく、ジョホールやベナンの村においても、郊外団地においても見るのできるのである。すなわちマレーシアでは、民族ごとに集住する近隣空間である「民族界限」が組み合わさって多民族が共住する空間が成立しているのである（本書：260）。「時間を超えて、生活空間を自律的に調整し共有する英知」をもって多民族が共住している（本書：261）。それは「共住」であって、たんなる「混住」ではないのである。

Ⅱ マクロな視点

マクロな空間スケールにおける変化については、おもに第Ⅰ部で展開されている。植民地時代をとおしてマレー半島では、マレー系が農村に中国系とインド系が都市に居住するという住みわけが行われてきた（本書：19）。1957年のマラヤ独立から69年の民族衝突までの独立期は、著者によれば「移民社会から多民族社会へ」の移行期である。この時期

においてマレー系の政治的な優位性が確立した一方で、中国系とインド系の出生地主義による国籍取得がなされた。著者はこれを妥協の産物ではなく協調の成果とみるという。ここにおいて著者は、たんなる混住の移民社会が多民族の共住からなる多民族社会へと移行しようとしているとみているようである。その後マレーシアでは1969年に民族衝突があり、1971年にブミプトラ政策が導入された。1970年代はマレー人優先策による貧困の根絶が目指されると同時に外資導入による工業化が図られた時期でもある。この時期には本書の第6章で展開される郊外型団地の開発が進んでいる。著者はつづく1980年代をマハティールイズムの時代と名づけて、この時期を国家主義、資本主義、イスラーム、人民主義、独裁主義、ナショナリズム、イスラーム化、マレー化、マレー語化というキーワードによって特徴づけている。著者によればこの時期に国民建築とも呼べる近代イスラーム的ないしはマレー的なモニュメント建築が目立ちはじめたという(本書: 22-23)。

本書が着目するのが90年代から2010年代である。1990年代、マレーシアはグローバルイゼーションへの対応のなかで、民族別の政治よりも「バンサ・マレーシア(一つのマレーシア国民)」や2020年に先進国入りを果たそうとする「ビジョン2020 Wawasan 2020」などの標語を掲げて、イスラーム先進国化と国民化をめざした(本書: 24)。つづく2000年代はマハティールからバダウィへとリーダーシップが転換するなかで、これまでの開発主義への懐疑が芽生えた時期である(本書: 29)。第5章のペナンにおけるクラン・ジェティールの継承やペナン・ヒル開発への反対運動がこの状況に呼応している。

著者によれば「マレーシアでこの20年間(1990年代から2010年代)におきた、経済、政治、社会の動きは、1957年の独立に並ぶ極めて重要な転換にあった」という(本書: 15)。この時期がマクロ的な転換であるという著者の主張についてはⅣの議論のところで論評することとして、ここでは社会経済的な変化について言及しておこう。1990年代から2010年代へかけてマレーシアの人口は増加を続けている。民族構成の大枠に変化はないが、ブミプトラ人口の割合が増加している。地方農村部にはマレー系、都市部には中国系が優勢という傾向は続いているものの、マレー系の都市化が進んでいる(本書: 38)。マレーシアの国民総所得は1970年以来上昇しており、2000年代に入ってからの上昇はめざましいという(本書: 41)。しかしながら、ブミプトラ政策以降の各種の施策によっても依然として民族間の経済格差はある(本書: 46)。

Ⅲ ミクロな視点

本書の魅力は、ミクロなスケールにおける多民族共住のありようを追っている事例研究であろう。本書4ページの図1-1にも示されているように、多民族混住と多民族共住は異なるものである。多民族混住は「ある時点の生活空間にみる物理的な混在」である一方、多民族共住は「時間を超えた生活空間の自律性、柔軟性、可変性」を特徴としている。本

書は、多民族混住と多民族共住を歴史的な時期区分などと連動して使用しているわけではないようである。これらはミクロな空間スケールのなかにおける個別の変化としてみたほうがよいようだ。

例えば、1970年代から開発される郊外の団地などでは、建設当初は多民族混住状態であったものの、転出や転入、転売などを繰り返していくなかで緩やかに民族境界ができていくと本書は報告している（本書：204, 図 6-6）。郊外団地における民族境界では荒廃が進展しないが、その周辺は混住状態となり荒廃することが多いという。とはいえ、建設から時間が経てばゆるやかな民族境界化が進んで、全体としての多民族共住が保たれるというわけでは必ずしもない。民族境界が形成される一方で、閉じられた空間の増加も同時に起きている。郊外団地のテラスハウスでは、増改築が進んで居住空間と外部を隔てる塀が高くなり、開放的だった空間やあいまいな空間が消えていく過程がある（本書：207）。そのことは、近年増加しつつあるゲッター化した高級住宅地とも共通している。それは多民族共住ではなく、たんなる多民族の混住である。

さて、民族境界は都市的空間にのみ現れるわけではない。本書の第3章におけるジョーホルの村落は異なる民族から構成され、国道から垂直に伸びる細い道路に沿って各々の民族境界が形成されている。異なる細い道路には異なる民族境界が形成されて、その間に国道と並行するような小道ではなく、異なる民族間の行き来の痕跡はないのだという（本書：72）。ベナン島南東部のSK村は「美しい村」にも選ばれたことがあるマレー系のみで構成された村である。隣接地域にはBL町があり、そこには中国系の商店が並んでいる。SK村ではゴトン・ロヨンと呼ばれる相互扶助活動やモスクへの寄進が行われ、村落内の環境は保たれている。また、都市や郊外においても指摘されたように、他の村落との中間領域である河川、排水路、幹線道路などは荒廃しているという（本書：90）。SK村を一つの民族境界としてみたとき、その周縁部が荒廃するという状況は農村地域でも同様である。ベナン島の都市化は東海岸部から進んでおり、高層のコンドミニアムが所狭しと立ち並んでいる。隣接するBL町の道路はすでに拡張され、SK村にもおよんでいる。都市化にとまなう住民の就業形態の変化によって、ゴトンロヨンなどによって民族境界の環境を保全してきた住民たちの意識は揺らいでいるという（本書：103）。その意味ではSK村が今後一つの民族境界として機能していくかは定かではない。

ここまで「民族境界」と「多民族共住」をキーワードにしながら、マクロとミクロの双方から本書をわたしなりの読みによってたどってきた。ここからは、六つほど議論を提示していきたい。

IV 議論

本書が提示する多民族混住と多民族共住という概念は、少々古いがファーニヴァルの

「プルーラル・ソサエティ」論を思い起こさせた。プルーラル・ソサエティとは、「一つの政治的単位のなかで、共同体の相異なる諸部分が隣同士でありながらも別々に存しているような社会である」(Furnivall, 1956 [1948]: 304-305)。プルーラル・ソサエティは「共通意思」をもつ均質な社会の対であり、共通意思をもたない人々のメドレーでしかない。著者のいう多民族混住はファーニヴァルの「プルーラル・ソサエティ」のようにみえる。それでは多民族共住とはなにか。多民族共住は「共通意思」によって支えられているわけでもない。そこが本書のおもしろいところである。多民族共住を支えるのは共通の意思ではなく、「自律的な生活空間の調整」である。つまり多民族共住は多民族的な共同体を意味しているわけではないのだ。バンサ・マレーシアや国民統合が達成されているわけではなく、そこにはただ生活の知恵があるのだ。強固な意思も閉じられた空間もなく、あいまいな境界が重なりあって調整しあっている。20 世紀の全体主義や今日のポピュリズムを経験してきたわたしたちは、逆にその消極性こそを評価すべきなのかもしれない。

第二の論点は時代区分である。民族共住というキーワードからファーニヴァルなどについて考えてしまったがため、著者が着目している 90 年代から 2010 年代がいかなる時代なのかが改めて気になる。著者は「経済、政治、社会の動きは、1957 年の独立に並ぶ極めて重要な転換にあった」と言う(本書: 15)。しかし本書はどのような転換があったのかをあまりはっきりと示していないようにみえる。タイトルともなっている多民族共住がこの時代に進んだのだろうか、変質したのだろうか。マクロの国土開発とミクロの多民族共住における連関が、歴史的な時間軸とともにもう少し明らかになる必要があるのではないだろうか。つまり多民族共住(たんなる混住ではない)は歴史的にはどのような局面で現れている現象なのか。その歴史的な前提条件とはなんなのだろうか。それは 1970 年代ぐらいから進行する都市化なのか、それとも植民地経済から開始する資本主義経済への包摂なのだろうか。

このことが明らかになると、本書が多民族共住を都市的空間のみにおいてではなく、農村地域においても探求していることの意義がより深くなるかもしれない。ただし、そのためには調査した二つの村の性格をもう一度位置づけ直す必要があるだろう。これが第三の論点である。調査された二つの村では、多民族が近接して居住していた。ジョーホールの RB 村は植民地時代のプランテーション開発にともなって中国系やインド系が労働者として雇用されたことから、多民族が近接して居住する村となっている。ベナンの SK 村はマレー系ばかりの村だが、すぐ近くまで都市化が押し寄せて、中国系が優勢であるとなりの BL 町と接している。その意味でとりあげられている二つの村落は、植民地経済への包摂や 70 年代の都市化にともなう変化のなかで多民族共住を経験してきたようにみえる。だが、日々の生活圏と他の民族の生活圏との物理的な距離がそれなりにある、西海岸でもケダ州のような稲作地帯の農村や東海岸のクランタン州の農村はどうだろうか。こうした地域においてもなんらかの形で共住が進んでいるのだろうか。興味はつきない。

第四は外国籍住民についてである。本書では、マレーシアにおける多民族混住問題を考えるときに、各所において外国籍住民についての考察がされている。本書の全体の論調では、マレーシアにおける外国籍人口は、自律的な調整をとまなう共住の域にはいたっていないようである。だが、将来的にはどのような展開があるのだろうか。ファーニヴァルのような、植民地時代にはたんに並列していた諸移民社会が、今日には共住のための調整を行うように、外国籍人口もいずれはその一翼を担っていくようになるのだろうか。それとも異なる展開があるのだろうか。このあたりについても今後の調査を期待したい。

第五は国民的建築にかんするものである。民族界隈の重なりによる多民族共住を「下からの」住民たちによる自律的な調整とみるならば、国民的建築に彩られるシャー・アラムやプトラ・ジャヤは国家が「上から」作りだした社会空間だろう。著者によればシャー・アラムの計画では、近代的な都市空間に「伝統的なカンボンの生活」の実現がめざされており、これまで建築物単体で導入された「近代マレー・バーナキュラー様式」が都市全体で体现された（本書：228）。それは「マレーシア」を具現化する方法だったという。この一文を読んだとき、わたしはジョン・ペンバートンが論じたインドネシアのテーマ・パークであるタマン・ミニを思い出した（Pemberton 1994）²。ペンバートンによればタマン・ミニは多様性のなかの統一によって表現される想像の共同体インドネシアを体现したテーマ・パークである。ただし、タマン・ミニは想像の共同体であるインドネシアを立体的に見ることができる屋外博物館に過ぎない。他方でこのシャー・アラムのマレー・カンボンではそこに実際に人が住んでいる。このような巨大なマレー・カンボンで住民はどのように生活するのだろうか。この人工的な巨大カンボンは、いずれは民族界隈からなる多民族の共住空間となっているのだろうか。このような上からともいえる計画都市においてもマレーシア人たちは時を経るごとに共住の知恵をはきするのだろうか。それとも、ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』において展開したようななんらかの規律化の空間となっていくのだろうか（フーコー、1977）。

ところでマレーシアにおける国民的な建築は、同時代の世界の建築潮流のなかにはどのように位置づけられるのだろうか。「マレー・バーナキュラー建築」としてあげられているマレーシアの国立博物館と同時期に作られた1964年の日本武道館は、日本におけるバーナキュラー建築のようにもみえる。あくまで建築物を構造や工法などからではなく表層的にみたかぎりの議論であると断り書きをしておく。そのうえで、この時期には世界中でなんらかのバーナキュラー建築なるものが生まれているのだろうか疑問に思ったのである。たとえばインドネシアのイスティクルルは、モダニズム建築にイスタンブールのブルーモスクのドームがかぶさっているようにみえる。ジャワの伝統的な建築様式を取り入れたスカルノ・ハッタ空港は、インドネシア（ジャワ?）・バーナキュラー建築といえそうだ。

² スランゴール州立モスク（ブルー・モスク）の未来的なたたずまいもシャー・アラムのテーマ・パーク的想像力に一役買っているようにみえる。

インドネシアのこれらの建築物は同時にイポのバンク・ヌガラ建物やペナン島のリゾート・ホテルであるシャングリラ・ラサ・サヤンの建物をも思い起こさせる。それらはコンクリートや鉄筋でできたモダニズム建築に現地的なモチーフをとり入れたものである。そうであれば、本書が「近代イスラム建築」として分類している建築群は、世界的にみれば中東諸国におけるなんらかのバーナキュラー建築とも関係しているのかもしれない³。つまり、「マレー・バーナキュラー建築」も「近代イスラム建築」もモダニズム建築と現地的なモチーフ（ミナンカバウ風の屋根の形象、幾何学模様、アーチ、ドーム）の総合による建築動向のなかに位置づけられるのではないか。ポスト植民地における国民的なもの、バーナキュラーなものが建築としてどのように表現されてきたのだろうかと考えてみると、じつは植民地時代におけるさまざまな建築的表象の領有なのだともいえるかもしれない。たとえば 19 世紀末に建てられたクアラルンプールのスルタン・アブドゥル・サマッド・ビルディングは、ネオ・クラシックな洋風建築にインド・イスラム的な要素が取り入れられている。20 世紀初頭には九段会館や旧台湾総督府などが和洋折衷の帝冠様式によって建てられた。ポスト植民地時代における国民的な建築物と植民地時代における建築物の発想は同じなのかもしれない。

第六として、ミクロなレベルにおける問題領域の方へ移っていこう。本書にはさまざまな魅力があるが、ミクロなレベルの分析において示される微細な住宅の間取り図もその一つである。村落部におけるマレー系や中華系の住宅の間取り図、クラン・ジェティの住居の間取り図、ペナンのインド人商店の図など、見れば見るほど人々の生活が想像できてとても興味深い。そうした間取り図をとおして、農村部の住宅において水場が住居の中へと組み込まれていくこと、マレー人の住居が高床から平土間化していくこと、郊外団地で増改築が繰り返されて空間が閉じられていくことなどが描かれている。欲をいえば、ここに今和次郎の考現学のような視点や、前述したフーコーが『監獄の誕生』で示したような時空間の再編による身体の規律化の視点などが導入されたら、よりおもしろい分析になるのではないと思う（今, 1971; 1989; フーコー, 1977）。つまり、これらの空間の改変や再編が人々の生活にどのような構造的な変化をもたらしたのか、近代的な身体の再構築と関係するのかなどの分析や考察である。

例えば、生活スタイルが村の一戸建てから郊外団地に移り、また増改築で住宅の内と外とのあいまいな空間がどんどん囲い込まれていく過程を、決められた時間割と空間配置をもつ学校、工場、オフィスでの活動に適した近代的な身体の形成などとの関連でみていくことなどはできないだろうか。マレー人の村の住宅の庭にはよく二人乗りのブランコが置

³ だが、本書で「近代イスラム建築」とされている、折り紙のような屋根ののった国立モスクは、いずれも 60 年代に作られたブラジリア大聖堂、スペース・マウンテン、代々木体育館などとの親和性を感じさせる。それはバーナキュラーなものというよりはむしろ、60 年代における未来イメージとでもいえるかもしれない。

いてあって、夕方になるとこのブランコに座って夕涼みをしながら家族や近所の人たちとおしゃべりをする。この独特な時間と空間は、学校や工場におけるそれとは異なるものだ。だが、学校や工場は、人々の体を定められた時空間に押し込めて、そこに適合するようになるまで改変してしまう（そして、人々はそれが自然だと思うまでになる）。郊外型団地の前庭の駐車場の片隅にもこのブランコが置かれているのを見るが、増改築されていくとブランコはどうなるのだろう。そしてブランコに座って家族や近所の人たちとおしゃべりをするという生活スタイルはどうなっていくのだろう。増改築にともなって、あいまいな空間やあいまいな時間は消滅していったいのだろうか。それともマレーシア人たちは近代的規律化にたいしてもジェームズ・スコットがマレーシアの農村で描いたような「弱者の抵抗」を行うのだろうか（Scott 1985）。

おわりに

本書は、1990年代から2010年代のマレーシアにおける多民族の共住を、マクロなスケールにおける国土開発とミクロなスケールにおける人々の生活から描こうとしたものである。この時代の背景には、緩やかな権威主義のなかで、堅調な経済発展を実現し、貧困の割合が減少しているマレーシア全体の状況がある。マレーシア政府は独立以来、国民統合をめざしてあれやこれやの政策を打ち出しつづけてきた。しかしながら、本書で微細に描かれているのは、住民たちが自律的に他者との共存を調整しあっているありようである。それは統合された強固な「バンサ・マレーシア」ではない。人々是对立を回避しながらじょうずに生活をしているのである。本書はその日々のありようこそを積極的に評価している。だが、マレーシアにおける多民族共住は達成されてしまったものではない。民族界限が重なりあう多民族共住がなされているそのかたわらで、調整力の機能不全も起きている。世界遺産都市にともなう家賃の高騰、計画性のない開発による郊外団地の失敗、外国人労働者の大量流入などだ。こうした変化のなかで、今後の共住はどのようなようになっていくのか、継続的な調査を期待したい。

本書のカバーする分野は多く、著者の専門である建築学だけでなく、社会、経済、文化、環境、都市と農村にかんするさまざまな興味深い論点がある。その意味でも本書は、マレーシアだけでなくさまざまな分野に関心をもっている読者をひきつけるだろう。

〈参考文献〉

- 今和次郎（1971）『今和次郎集 第1巻 考現学』ドメオ出版。
 今和次郎（1989）『日本の民家』岩波書店。

ミシェル・フーコー (1977) 『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社。

宇高雄志 (2017) 『多民族〈共住〉のダイナミズム—マレーシアの社会開発と生活空間』昭和堂。

Furnivall, J. S. (1956 [1948]) *Colonial Policy and Practice*, New York: Institute of Pacific Relations.

Pemberton, J. (1994) *On the Subject of “Java”*, Ithaca: Cornell University Press.

Scott, J. (1985) *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, New Haven.

(いぐち・ゆふ 立命館アジア太平洋大学)